

L O N G I N T E R V I E W

宮崎 駿

talk by Hayao Miyazaki

森と

The Forest and The Human-Being

人間

南 正時 = 写真
photograph by Masatoki Minami



日本が進むべき道は、自分の取り分の、ほんの
差し出すような国、他には無いです。だから、

わずかを、当然の事のように他の生き物のために
儲ければ他の生き物の方にも回そうと思うんです。



The Forest and The Human-Being

talk by Hayao Miyazaki

『もののけ姫』は日本を舞台に、古代の文化が描かれていたわけですが、どういう点に魅かれたのでしょうか？（注）この映画は中世の室町時代を舞台にしているが、主人公のアシタカは、古代に亡んだ蝦夷の

宮崎駿の先祖（？） 蝦夷と、古代の人々を巡って

いう蝦夷の最後の王が殺され、一族は服属する。その後、その末裔の安倍氏が朝廷軍に勝った。前九年の役や、同じく蝦夷の末裔で、清原氏という、平泉の藤原三代の元になる一族の、一族間同士の争いを源氏が鎮圧する。後三年の役が起る。蝦夷は最後まで中央政府に反乱を起こした民族なんです。初めは大和朝廷それから鎌倉幕府へと相手は変わるわけですけど。このように、かつての日本の東の方は込みみについて、蝦夷だけでなく、色々な国が日本にはあったということなんです。

さらにもっと前には、例えば、大和盆地にできた王朝があり、それ以前にも北九州に王朝があったり、東北の方は東北で別の王朝があった。出雲にもあったし、吉備にもあった。いたる所に国々があった、それが最終的に、古代に大和朝廷の下に統一されるのですが、その時でも、東北の秋田から岩手とか、津軽などには別の王国があった。

王国と言ったのがふさわしいかどうかはわからないけれど、ちゃんと国があって、それぞれの文化があったんです。それがなんとなく、ぜんぶ壁に塗りこめられたようになって、よく判らなくなりました。だから日本の歴史っていうのは面白くない。色々な人達がいて、そこで色々なことがあって、勝ったりも負けたりもしたけれど、そうしたことを経て今日があるのだ、という考えの方がずっと豊かになる。

そういう意味からすると、現存する蝦夷の姿というのは絵描きがいい加減に、ほとんどわけもわからず、鍾馗と鬼が混ざったように描いている。青森県の「ねぶた」などに出てくる、坂上田村麻呂がアテルイをやっつけている絵なんかでは、アテルイはまさに鬼なんですよ。

「壁に塗りこめられた」と言いましたが、実際の蝦夷に関して、こういうものを着ていたとか、映像的な資料は何も残っていないんです。

そうすると、映画では想像で作る部分が多くなるわけです。僕は、この人たちは着物をきていたに違いないと思うし、丁髷を結っていたのではないかと思うんですよね。司馬遼太郎さんに会ったとき、「蝦夷は、丁髷はどうやっていたと思いませんか？」と聞いたら、「月代を剃っていたんじゃないかな」とおっしゃっていた。



末裔である）

宮崎 古代の文化といってもそう簡単に説明できるようなものではないんです。映画の冒頭に蝦夷の村が出てくるんですが、なぜ蝦夷かということ、僕は西国の人間ではなく、関東の人間で、多分、自分の中に蝦夷の血が濃厚に流れていると思うんです。鼻の穴の格好とか色々なものを見るにつけ、ずっとそう思ってきました。

そうするとこちらは困るんですよ（笑）。古代においても日本人は、男はみんな被りものをしていましたけれど、その下は「月代を剃っていたのではないか」というのが司馬さんの勤。

でも僕は違うと思います。だから、今度の映画ではああいう髷を結わせている。あれは唐風の、中国風の髷であって、あれを蝦夷が本当にやっていたかという点と甚だ疑わしいと思っはいるんですが（笑）。しかし、月代の毛を剃ってしまうと、多くの時代劇を観慣れた日本人の中にある引き出しに、いわゆる「侍」のイメージでホイとほうりこまれてしまふ感じがあるんです。それに、アテルイ王がああいう風な唐風の髪の毛にしていて、その首を祭った神社が、東北地方にはずいぶんある。首を作った人たちも想像で作っているんでしょうけれど、そういう髷を結っています。

考古学妄想がいっぱい。

知識を仕入れるのは、どのような資料からなのでしょう？

宮崎 そういふ本は一杯出ていますよ。写真はいいです。さっきも言ったように、映像的資料はないんです。例えば新しく書かれた『日本史』とか、蝦夷とはどういふ人々かということを巡って、様々な意見がでて、色々な本が書かれています。引用文が多過ぎたりして、僕なんか読むとわけのわからない本が多いですけれどもね。考古学的事実だけで書かれたものがあるというのですが。

他に蝦夷でいうと、例えばアシタカの持つ藤手刀という刀。刀というより、山刀ですが、本当は、意外とちよつと曲がっているんです。アニメーションで描く時は、面倒なので真っ直ぐに描いてありますが、湾曲していた方が、山刀というのは使い易いでしょう。曲がっている事で、木の枝を払ったりする時に便利なように作ってあって、その柄の所が、中が空いていて鉄の棒になっているんです。その上にたぶん何かを巻い

だから、蝦夷に近い日本人として 日本という国は近代国家になっていく過程で色々変化していくのだけれど、自分達の重要な先祖である蝦夷という民族を、ただの蛮族と考えるのは間違いと思っはいるわけ、どういふ暮らしをして、どういふ姿形をしていて、どういふ歌を歌っていたか、というように色々なことを夢見るのが結構、好きなんです。好きな道楽といえますか。大和朝廷の征夷大將軍、坂上田村麻呂にアテルイと

たんでしょつが、叩いているときの衝撃が柄で吸収できるように思っはいるんです。その格好が芽を出したばかりの藤に似ているのではないかと、思っはいます。それが関東地方の東側から東北の全域にかけて、全域と言っても仙台の辺りまでで、八世紀位までのものです。よく考古学の発掘で出てくるんです。それが、ある時期からブツンと切れて出なくなるんです。その切れた時に、蝦夷の独自性が失われて、大和化が進んだのだらうと思っはいるんです。残念な事に、それらの鉄は粗悪品なんです。このようにかつての日本には、日常的に使っはっている刀まで違う民族がいたということなんです。

全く別の文化を持った民族がいたということですか。

宮崎 いや、僕は、多分そんなに違っはいた人々ではないかと思っはいます。みんな日本人という事でね。一番古い日本人という、青森の三内丸山遺跡に見るように、東北の方、東半分の方が縄文時代は盛んだったけれども、実は、最近になって南九州の鹿兒島の先づの白砂台地の所にも、巨大な縄文前期の遺跡が出てくるんですよ。だから、南の先づと東の先、真ん中の照葉樹林帯を除いた両側に、縄文時代の文化の大きな代表的存在があったのです。白砂台地も照葉樹林帯ですけど、そういうものが混ざって、日本はできたんです。難しいでしょう？ これは、際限もなく難しいんです（笑）。

人によって全然意見が違っはうし、色々な学説が出て、そういう事で妄想を働かせる人達が一杯います。僕も妄想が好きですからそうですが、考古学的な発掘が進むと、色々歴史上の地図が変わっはってくる。この前、荒神谷遺跡（鳥根県）で、大量の弥生青銅器が出たんですよ。それで、出雲の中に、はっきり大和政権とは別な王朝があったことが考古学的に証明されたのです。大國主という神が、大和政権に出雲を引き渡したという話になっていますが、そういう神話が示していることが、かならずしも嘘ではなくて、そこにはっきりした王朝があったのでしょつ。王朝という国が。



The Forest and The Human-Being

talk by Hayao Miyazaki



そういうことが、日本は情けないことに、混沌としてわからなくなっている。

何だか日本の風土に似ているのです。

草が生えて、木が茂ったために、そういう事があつた跡がみんなわからなくなってしまう。

日本は、地質学がなかなか進まないんです。

全部、木が覆ってしまったってわからない。

それに比べヨーロッパではすぐわかります。グリーンと断層が出ていたりしますから。

まるで日本は、植物園の中みたいですね。何でも腐ってしまうから、遺物が残らないでしょう。だから、三内丸山遺跡でも、小さい木製品が出てきたときは大感動したのです。縄文前期とか、本当にむかしの植物性の遺物が出たのは、日本では本当に珍しい。普通は腐ってしまう。長野に私の山小屋（信濃境にあり、宮崎さんが映画完成後にリハビリにこもる瞑想(?)の場所)があつて、そのそばでも、死に物狂いで掘っているけど、酸性土壌の強い所ですから、土器のかけらと石器しか出てこない。食べ物の残りカスでも出てこないかなと思っんですが。

三内丸山遺跡で「ワーツ」と騒ぎが起つたのは、みんなが「違つのではないか」と思っていたことが、「やっぱり違つていた」ということになつたからです。それは、西から文化が広がつたという説のことで、そうではなくて、どうも北は北の方で、南は南の方で並立して色々あつて、闘争や談合の下にまとまつて日本という国が形成されてきた、ということなんです。決して、文化は大和政権がもたらしたのではない。あるいは、渡来民だけがもたらしたのではない。同じ渡来民でも、ずっと前からこの国に住んで、この風土に馴染んで文化を作り上げた人たちが、自分達の文化の基調をなしている。そういう例証が、三内丸山遺跡で生まれたわけです。

あの遺跡には六本の巨大な栗の木が立っているのですけれど、僕は、あれはただの棒だと思ふ。絶対に間違いないと思つています。巨木に神が宿るといふ信仰が、やっぱりあつたと思うのです。あの佐賀の吉野ヶ里遺跡の構説にも気に食わないところがありますね。あれはただの棒に過ぎない。あれを、櫓を立てるための棒と考える意味なんて、何も無い。あんな巨大

そんなのですか。

宮崎 そんなことは、本を読んでいけばいくらでも出てきます。五〇年以上、色々な物を読んだりしていると雑学は溜まるのです。なんて、そんな話はどうでもよいのですけれど(笑)。鑑に関して言うと、日本は鑑の発達した変な国ですが、西洋でも独自のものが発達しました。それに比べて中央アジア、ユーラシア大陸全域は、随分前に完成した格好のままで、基本的に鎧帷子だったり、外套に鉄片を縫い込んだり貼りつけたりする外装式の鑑が占めていたのです。けれど、西洋と日本の方だけは発展して、西洋は、口ポットのようになつてしまつた。

あの格好では、天気がよい日は、暑くて戦争ができません。日本は何でも貼り付けていくのですが、着るのに時間がかかつてしょうがない。とまあ、これもどうでもよいのですけれど、僕は、蝦夷の人達も実は着物をきて、帯を締め、脚半と手甲をつけていたと思うのです。ほぼ間違いない。彼等は農耕民です。

自然に対して 狂暴にふるまってきた人間

別々の文化が並立して存在することや、別々の文化であっても共通性があるという認識がこの映画にあると思います。そういう映画をつくるにあたって、現代に向けてのメッセージは。

宮崎 全然ないです。

メッセージで僕は映画を作りませんから。

ただ、この映画が現代に共通する点があるとしたら、それは、自然と人間との関わり合いだと思ひます。僕らは、「自然に優しい」とか、「宇宙船地球号」などと言も言った事はないんです。「自然に優しい映画を作るジブリ」というブランドが勝手に横行するよう

な櫓を立てるとしたら、大変な祭りをやらなければならぬし、ただの見張り台を作るとも思えない。ただの見張り台だつたらもっと細い棒でいい。その上に偉い人が乗るはずがないですから。

色々な意見は、それぞれ出てくるのですけれど、戦争があつたとはいへ、あの遺跡を軍事施設だということも大きな間違いだと思つているんです。だって、柵の内側に堀があるなんて、かえつて攻められるようなものじゃないですか。柵の外側に堀があつて、敵がなかなか渡れないところを内側から弓矢で殺すというのならわかるけれど、自分達の内側に堀があつてどうするんです(笑)。守れないじゃないですか。

僕は、全く、違う考え方をしないと、吉野ヶ里の遺跡にしても、理解できないのではないかと考えている人間なんです。妄想がいっぱい出てくる世界なので、そんな事はどうでもよいのですが。

けれど僕は、蝦夷も含めて日本人というものを考えたい。大陸系の顔の人もいるし、朝鮮系の顔の人もいる。それから南方系の、僕の鼻みたいな形をしている、インドネシアにいっぱいいるような人もいる。そういう人間たちを含めて、日本というのは出来上がった。日本の原形というのは、米や稲だけでなく、色々な所で色々な事が始まつて、それらがちゃんと基調をなして、全部消えるのでなく、あるものは残りながら今の習俗が決まつているんです。

話を蝦夷にもどすと、彼等は同じ照葉樹林文化の、ブータンなどに住む人たちと似た格好をしている。僕は道楽で思つています。映画の冒頭に、蝦夷の三人娘が出てきますが、傘を被つて、黒っぽい着物を着てそこに赤い帯がついている。本当は刺繍でつけた位なんです。そんな細工はアニメーションでは難しいから、帯をつけただけですけど。その三人娘を、一番気に入つていたりしてましてね(笑)。それはタイなどの山岳地方の焼畑をやっている人たちの格好なんです。脚半をつけて手甲をつける姿は、ブータンなんかもそうです。王様だつてドラテラに脚半を履いたりしています。お米は、ジャボ二力種の粘りの強いのが好きです。そういう共通性があつて、本当によく似ているのです。

なつて、それが嫌なのです。

そう誤解されても、しょうがないと思わざるを得ないのですけれど、この十数年、とにかく色々作品を作つてきて、この大きな転換点にきているのに、「自然に優しいジブリ」で終りたくなかつたのです。

だから、自然と人間との関わり合いをもっと突き詰めて追求して行く。すると、人間のやつてきた事業というか、文明の本質にある攻撃性とかが見えてくる。散々、相手を痛めつけて、おとなしくさせてしまつてから、「周りに残つた者に優しくしよう」と言つているに過ぎないんです。

文明の本質みたいなことをちゃんと描かないで、「優しくする人、よい人」「優しくしない人、悪い人」という考え方で切り捨てていくのは、間違いだと思ひます。優しくする人が、優しくなかつた人が、人間は自然に対して極めて狂暴に振る舞つてきたんです。

それで、自分達が選ばれた者であるとか、この人類が一番高等な生き物であるとか言ひ出す。ある時には人類の中のある部分が一番高等だと順番をつけたがる。今また、「優しくする人、よい人」「優しくしない人、悪い人」という判断の単純化が進んでいる。そんなものではないんです。よいとか悪いとかでなくて。

こういう人間の本質みたいなものを据えた、自然と人間との関わり合いを描く映画を作りたいと思つています。それはメッセージというものでもなく、自分自身に回答が出ていないから、甚だ迷走しながら映画を作つたんです。

この映画は、「悪い人間が森を焼き払うから正しい人がそれを止めた」という映画ではないのです。

よい人間が森を焼き払う。それをどう受け止めるかなんです。

ハイチのように、実際にそういう状況があります。自分の横にいる子供を飢えさせないために、木を伐るのです。貧乏で石油ストーブもないし、電熱器もないから、炭が燃えるのです。

そのために、木を伐つて全土が丸坊主になり、さらに漁業もだめになる。何とかしないとハイチは滅びます。軍事独裁政権が悪いとか民主主義がいいとか言つてもだめなんです。

日本は鑑の発達した 変な国

宮崎 それから僕が面白いと思つているのは、日本の鑑なんです。

日本の鑑は部分部分を貼り付けていく。

昔の狩人の服装を知っていますか？

この人達もね、狩りをする時に雪の中を歩くでしょう。どういつ防寒着をつけているのかという(立ち上がつて説明を始める)。背中が寒いと背中に皮を貼る。腹が寒いと腹につける。腕が寒いと腕につけるんです。一枚に縫えばよさそうなものでしょうけどそうじゃないんです。足が寒いと脚半をつけて、尻餅つくからと、腰に腰布をぶら下げている。このやり方は、日本の鑑とそっくりなですよ。つぎはぎで足していく発想なのです。

僕が、江上波夫の『騎馬民族説』(日本人の祖先は騎馬民族だという説)が間違いだと思つている訳もそこにあつて、騎馬民族というのは外套とズボンなのですが、それは、大昔から人間が履いているももひきとは違つたんです。そのももひきというのは、足が寒いかからズボンの足の部分だけに履いて、腰の部分はない。そこにフンドシ(褌)をするんです。まるでインディアンの格好でしょう。こんな事はかり言つていてもしょうがないです(笑)。

あの格好は、新石器時代以来の世界中の人間がやつた事なのです。五〇〇年前、アルプスの、イタリアの方からスイスに行く大きな時、昔羊飼いが行ききしたところらしいのですが、そこで氷河の中で発見された死体が、まったく同じ格好をしているのです。「アイスマン」と言われてますけれど、ズボン袋をつけて、フンドシをして、合羽のような皮の外套を着ているのですよ。そういう格好を見ると、馬に乗る人達のズボンや外套と違つたんです。日本もそういうのは作らないで着物のままでした。日本もそういうのは作らないで着物のままでした。では、インディアンの馬に乗るのになぜそういう格好をするのかという、あれは馬に乗り始めたのが、随分後だつたからです。白人が来てから、馬に乗る暮らしがスタートしたんです。

生態系に依存して生きている人間が、本当に生態系を破壊し尽くした時にどうなるかという事を、今、まさにやっています。

北朝鮮も同じです。

これらはなにも最近に始まつた事ではなく、人間は繰り返して繰り返してそれをやってきた。

ただ、日本の場合は、自然の方が回復力が強かつた。人に優しい自然なのです。

国の西半分が照葉樹林という、鬱蒼とした暗闇に覆われている所に、人間がチマチマ入り込んで

「神様、お願いします。許して下さい、許して下さい。」と言ひながらどんだん木を伐つた。何度も、伐り倒し、焼き払い、伐り倒し、焼き払いしながらも、とにかく雨が多くて湿潤な夏がある事によって、回りの自然は、岩山にはならなかつたんです。木がなくなり土が流れてしまつと、岩山になる。岩山になると、回復が物凄く難しい。

同じようにやつてきたのに、朝鮮半島や大陸に比べたら日本の山は、中国地方の山を見ればわかるように、ずいぶん山様は変わつてきているだろうとは思ひますけれど、とにかく緑の山を保っている。谷は埋められて平らになっていますし、そういう、風景まで変えるほどの破壊をしてきたのに、山が緑で残つてきたのは、この島が持つている特殊な能力、特殊な恩恵なのです。木を伐つたその後に出上がった風景が今僕らが自然と言つている日本の見えない風景だと思ひます。それを僕は自然と呼んでいて、その時の記憶がその前に深い、恐ろしい自然があつて、その時の記憶が自分達の心の底にある。山奥には人が踏み入つたことのない清浄な土地があつて、鬱蒼たる森と清らかな水があつて、実はそういう形が日本の自然のいちばんの中心ではないかと思つたんです。それが変わったが、今、今の慣れ親しんだものになつた。日本人の庭というのが、深山幽谷を狙つたというのはその自然観を反映しているのです。だから、森をずいぶん伐り倒して山様を変えたにも関わらず、自分達の心の奥底には、やっぱり神がいて、そこに、いちはん清浄な部分があるという記憶だけがいつまでも残つている。僕も、そういう記憶がいつの間にか植えつてられています。

子供の頃の漫画で、山奥をどんだん進んで行くと川

The Forest and The Human-Being

talk by Hayao Miyazaki



「木を植えた男」フレデリック・バック
(1987・30min.)
5年半かけて色鉛筆で描かれた2万枚の絵
によるアニメーション。名作中の名作。
LDには宮崎監督のインタビューが掲載
されている。
(パイオニアLDC / 税抜7500円)

に簞が流れてきて、「この上に人がいる」と登って行く
と仙人がいて、主人公は忍術を教えてもらおうといよ
うなものがあつたけど、それを読むと何か納得したり
しました。

そういう所は、日本の山の中にもいっぱいあるのだ。
例えば僕は、一九六〇年代の最初の頃に学生時代が
終わったのですけれど、その頃、奥日光に行く、ま
だ見つかっていない湖があるというような話を信じて
いました。

今でも屋久島などに行くとき、「本当は、縄文杉よりで
かい杉の木があるのだけれど菅林署が隠しているのだ」と
地元の人が言いますからね(笑)。そういうことが奥
深い山にはあつて、そこには人が手をまだ染めていな
い清浄な地があつて、そこから人里に近づくと、下
界に行くに従って穢れていく。

そういう世界観をもっていたのです。
最近の人がどう思っているかは知らないですけど、
全部、土地の値段が決まっています、そうじゃない所
は国有林か、あるいは全部ゴルフ場の対象になると思
っているかもしれない。

それは日本人が変わつた証拠なのですね。
しかし、かつては原始的な信仰心を色濃く持つてい
たと思つたのです。
自分たちで、食つために焼き払いながらも、森の持
つていて神を認識していた。

ここでいう神は、魂をつくっている神ではなく、人
間が崇める前の大昔からこの土地にあつて、生きとし
生けるものの根源をなすようなもので、漠然とした思
いなのです。
だから日本の神道では清浄な所を決めて、いつもそ
こを清らかにしておいて、穢さない。

荒涼たる大地も、 かつて緑で覆われていた

宮崎 話がどうも脱線しますが、僕は、日本の自然
保護の方法というのは、全ての山川を神社にしてしま

かつて、あの話はオークの木を復活させようという話
なのです。だけど、プロバンスの「十一月」を読んで、
「プロバンス素敵」と言つて行つてくる人たちは、あ
そこは、自然が素晴らしいわ」と帰ってくるのです。
あそこは昔はオークの森で、

『木を植えた男』は、オークの森を戻そうとした空想
だけど、フランス人が書いて、それをフレデリック・バ
ック氏が映画にしたとは、誰も気づかないですね。
あの自然は、実はひどい自然なのです。

だけど、プロバンス人は脳天気で、「今がよければ」
という生き方をしているから、北方のイギリス人が行
つたら、びっくりしちゃうのです。
人生の楽しみ方を美に心得ていてね。この食事には

このパン、この料理にはこのワインが合つとか合わな
いとが、そういうマニュアルが山のようにあり、粗食
なイギリス人は「ウォー」と、びっくりする(笑)。よ
いか悪いかで言つたら、それもまさに、人間が築いて
きたものだから魅力がある。イタリアの魅力は、それ
ですよ。ルネサンスもあり、嘗々と人間が築いてきた
ものがそこにある。その奥深さといひ、面白いのです。
中国も面白い。

日本の森と 外国の森

宮崎 けれど生態系が残っている所は暗いです。暗い
と言うか、わけのわからないところを人間は持つてい
るのです。だから、全体主義と言つても、イタリアの
ファシズムと、ドイツのナチズムとは違つと思つてい
ます。ナチズムは恐ろしいけれど、ファシズムはいい
加減なのです。アナーキーなんです。そういう所の
人間って。

うしくないんじゃないかと思つ(笑)。
「この山は御神体だ」とか、白神山中は、「あの山こ
そ神のいます場所だ。そこをお前らは穢すのか、七代
樂座(笑)とか

「あそこはーさんが早死にしたのは、木を伐つた
からだ」とか言えは、なんとなく分かる(笑)。
そういうような部分を日本人は、いまだに残してい
るのですよ。

日本人がメチャメチャにしたこの風土を変えさせる。
いちばん大きな根っこというのは、「人間にとつては緑
が必要だから残しましょう」という功利的、西洋的な
考え方ではなくて、「清浄な所を穢してはいけないの
ではないか」という思考と結びつくような考え方です。
それは人間だけではなく、ミミズにしても、鳥にし
ても、あらゆる生き物の根源はそこにあるのだといふ
原始的な考えといふか、簡単に植物が一掃されないで、
繰り返し、繰り返し生えてくるような生命の循環を目
撃できるような、この土地に自分達が生きてきたせい
だと思ひますけれど、そういうふうな物の見方になら
ないと、「この国をもう一回、回復させることはできな
い」と思つたのです。

自然を回復できないほど痛めつけた民族が、どうい
う民族になるかと言つと、ラテン系民族のようになる
のです。
本気で、この世の事しか信じない、

「今がよければ」の現実主義になります。
そういう意味では、中国人もそうです。
あそこでも漢代に生態系をぶち壊してきた。
単に、よい悪いで言っているのではないです。

中国の人が、自分達の一生を書くときに、春秋戦国
時代の、孔子がウロウロしていた時代には、緑が満る
中国があつて、今は荒涼たる黄土高原に、かつて木々
がいつぱい生えていて、そういうところに人がいたと
は書かないですよ。

昔から、黄塵万丈の荒涼たる風景の中に、人々が騙
し合つたり、つるんだりしてやってきたのだと思つて
しまつたでしょう。
自分たちのかつての国の姿を忘れているのですよ。

シシリーも、絶対王政の時代までは木に覆われた島
だったとは、書かれてない。

フランスでも就職難だったりして、若者の自殺は多
いのですけれど、実は、フランスの中で、若者の死亡
は、ほとんど、緑が満つている北半分なのです。ツ
ール・ド・フランスの方なのです。

人間に役立つものしか生えていない南仏の方は、自
殺者がいないのです(笑)。イタリアでは、そう言われ
ているのですよ。別に、僕は新説を披露しているわけ
ではなくて、聞き齧つた中から、かつてに妄想を膨ら
ませていただけで、ほんとはデビッド(ジブリの仏人
アニメーター)から聞いたのですが、「こつこつ話を
していると、映画の話をした事にならないですね(笑)。

僕らは、明治神宮は、大正の時代(大正四年起下
同九年竣工)につくられた明治天皇のためのものとい
う事を忘れてはいるのですよ。あれは明治天皇を神様
にして、それを拜む神社です。あの時、大隈重信とい
うオジサンは、参道に、杉の並木をパーッと植えよう
と考えました。日光の東照宮に続く参道のように杉並木
を。しかし、植物学者が抵抗したのです。「関東地方に
杉の並木を作るのは馴染まない」と。それで、ああい
う森を作つたのです。それが今では、かなりの森にな
つている。

基本的な部分は照葉樹林ですが、それは、西半分の
土地が照葉樹林帯だったから。
神様がいる所だけは、そのまま森が残つたのですね
中に入つてみるとわかるけれど、日の光が入らない
森なのです。それに比べたら、雑木林とかブナ林なん
か歩くと清潔ですよ。ま、夏になると、ちよつとつ
とおしくなるけど、それでも新緑の時とか、秋の季節
に歩くと清潔感のある森なのです。

照葉樹林というのは、「何かいそつ」という感じがす
る。それは沖縄なんかのウタキ(祠)の、福木などで
覆われているところに行くとかわかります。怖いから、
福木の巨木を御神体にしてはいるところもあるけれど、

昔から岩山だらけの酷薄の土地で、
だから、マフィアがすぐに入つてきそう、そとい
う土地だと思つている。
違います。

ギリシア時代、あそこに植民都市ができた時には、
緑の滴る土地だったのです。
ああいう風にしてしまったのは、人間なのです。
今、住んでいる人間は、そういう事をすっかり忘れ
てしまつていますが、ではなぜ、死滅しなかったのか
と言えは、ああいう土地でも生えるオリーブという植
物を発見したからです。そういう意味では、オリーブ
の畑というのは、砂漠のような最低のところですか
らね。しかし、そのオリーブ油で、スバゲッティなんか
を食べているんですけど。

そやつて生き延びたところもあるのですが、ユー
ロラビアはそうではない。
ユーゴの航空写真を見たら愕然とする。

「これは、緑をみんな人間が喰つてしまつたのだな」と
思つた。つまり昔は日本で言う柏の木、大きな葉つ
ばでドイツゲルマンの象徴であつたり、バスケットがそ
の大きなおおきな木の下で集会を開くといふ、オーク
(柏)の木が、地中海の沿岸を全部覆つていたのです。

イタリア半島もリベリア半島も、プロバンス地方も、
柏は、すこく立派なデックイ葉つばができる木で、
その木が基本的に、ヨーロッパを代表する木だったの
ですが、使い易くて、船を作るのにもよいし、薪にし
るのにもよい。だから、次から次へと伐つてしまつて、
本当になくなつてしまつた。

それで風景が変わつた。
プロバンスなんかハゲ山になつてしまつて、後は人
間の役立つものしか生えていない。防風林として、し
ようがないからポプラを植え、その間で葡萄をつくつ
てワインを飲む。

人間に奉仕する作物ばかりなのです。
そういう訳で、あの地方は、昔、オークの森だった
のです。
『木を植えた男』(F・バック監督、一九八七年)と
いふのはそれを回復する話ですね。

プロバンスを舞台にして、不毛の地にドングリを一個
一個蒔いていく。くる日もくる日も、何か月も何年もか

それは、わかります。「あつ、何かいるところだ」と。
それは、ここにはキツネとか何かが増えています、と
いふようなものではなくて、木が気を発しています。
そういう森ですよ。そういう森は、恐ろしい森ですか
ら、そういう森は放つておけばそういうふうになつ
てしまふのだけど、人間が繰り返し、繰り返し木を
伐り続けたり植えたりして、今の日本の、西半分の山
は、浅い山になつたのです。

どこかが御神体になつてはいるようなある島とか、山
の奥とか、春日山の原生林とかは、散々、手が入つた
後に、このままではだめになつちゃうからといつので、
原生林にして保存しようといふだけです。こつこつ忍
び込むとわかるけれど、元の登山道の舗装されたやつ
が枯葉に埋もれていたりしている所ですから、随分
木を伐つた後があります。

屋久島に行くときよく判かる。
あまり人の手が入っていない照葉樹林帯があります。
そこは、下草が生えない。生えないから歩き易い
のですが、森といつても、ロマンチックな気分には絶対
にならない。雑木林を散策するといふような気持ちに
は、絶対にならない。シンとしていて、ついキョロ
キョロとあたりを見まわしてしまふようなものですよ。
そういう深い森を人間がつかいやすいようにしたの
です。日本人は、特に西半分では、水田と耕作と結び
ついて、日本文化の、ある部分の基調をなしたのでと
いふような気がします。

浮き世から離れて森の中に入つて行くと清浄の地
がある、というイメージが、日本人に共通にあるとい
ふことでしょうか？

宮崎 今の若い人というのは、よく判からないけれど、
そういう気分というのはあるのかな？ 僕は、屋久島

The Forest and The Human-Being

talk by Hayao Miyazaki



に行つたときに若い人が「わーっ」と騒ぐのは、そういうのと出会つた瞬間だからだと思ひました。実は、そういう風景というのは、ニュージールランドの先端の方などにもあります。やはり雨がが多いから、南半球であるにもかかわらず、見覚えのある自然があつたりします。

テレビ番組の録画をビデオをみただけで、行つてはいないのですけれど、そこは完全に制限されているところだから、一年間に入る人間の数まで規制されてます。全行程歩きだけです。しかもソロソロ連なつて歩くのではなく、ひとつのパーティが出発したら、時間をおいて次が出発するというやり方でしたか入れない。泊まるところも決まっています、という保存の方法をとっている。

その場所の木の生えかた、水の澄みかた、鳥の飛びかたには、かつて日本はこうだったのではないかという風景が残っている。

またアイルランド。南の国有公園では当然公立公園だから木が残っているところがヨーロッパの木というのは乾いているのにアイルランドは雨が多くて、いつも降っているの、木に腐がからまり苔が生える。全く、違うのです。

子供の頃「ケリムの昔話」で、山中に迷いこんで木の虚に寝るといつ話を読んで、「木の虚で寝られるのかな？」と思う。日本で木の虚を覗くと、どうして、こんなところで寝られるものかと思う。ゲジゲジやダンゴ虫やらウジャウジャ這っていますからね（笑）。そう思うでしょう。

ところが、乾燥したところの森に行くと本当にきれいです。サンフランシスコ近郊、ヨセミ国立公園デッドウッドの森に行くとか判かるけれど、物凄い巨大な木が生えてるのですが、乾いています。パサッとしていて野宿に楽だなと。

日本だと、ミミズだとかいるんなものが入りこんでくるのではないかと、思うけどそれが無い。僕なんかは不自然な感じがして嫌なのです。ミミズだらけ、ゲジゲジだらけ、ダンゴ虫だらけの方がね、「これが自然だ」と、どこかで思う自分がいる。

こういう話はかりしていると、この映画の取材にな

つも喰えるようになった。文明とは、そういうもので

神がいましたら、やっぱり、その富を奪うこととはできないから、人間は、もっと貧乏だったはず。文明というのは、人類が自然からの収奪によって、成立しているのですから。文明を全否定したいとは思わないです。

狩猟民族は知恵があるというけれど、それならマンモスは滅びないわけですね。殺して、殺しまくったから、マンモスは滅びたのです。

やっぱり、獲物が多いときは、随分雑な事をやるのが人間です。

これはアルゼンチンに行つたときに聞いたのですが、最初に入植したスペイン人が入植に失敗し、牛を放して帰ってしまった。その次に白人が来たとき、一五〇万頭か一五〇〇万頭が忘れましたが、パンパという大草原が牛だらけだった。

もう死ぬ程（笑）牛、牛、牛だった。それで、喰い方も乱暴なことをした。一匹殺して舌だけを食って、残りは捨ててしまつとか、そんなことを散々やってきた。

人間とは、そういうものなのです。何も、アルゼンチンのパンパの、カウチヨたちが悪かだからやったというのでなくて、誰にもそういうところがあるのです。

都市生活をしていけば、鶏を殺して食う現場なんかにも立ち会わなくても済むし、肉はスライスして、あるいは料理されててくる。

ある種の人間達が賢く、ある種の人間達が馬鹿というのではなくて、みんなバカなのです。人間は、愚かというより、物凄く狂暴な生き物なんだということなのです。

人間生存の本質には残酷な部分がある。他者に対して、同類に対して、残酷な部分を持つています。持っていることを全部なかつたことにすると、どこかで噴出する。暴力というものを悪いものと片付け、単に否定するのは間違ひです。いつも言っているのですけれど、吉祥寺の街で年に一回、スペインのようなお祭りをやって、獺猛な雄牛

らないんじゃない？と思うけれど、そういうことを訊くからいけないのですよ（笑）。なんて言ってますが、それは映画をつくるために勉強したことというよりも、やっぱり、自分というのは何者だろう？と考えていく過程の中でできてきた妄想ですね。

人間は自然に対して どれだけ支払えばいいか

そういう思考が今回の作品に全面的にでてきた、ということですか？

宮崎 いや、まったくでてこない（笑）。

僕は、日本の自然がすっかり変わってしまったから人間ですから、そういう自然は好きですよ。本当に、二世紀を突つ切るためには、そうした方がよいと思ひます。ただ、人間、これだけの所得（タバコの箱を見せ）があれば、この位（タバコの箱の角を指して）を他の生き物のために使えばよいのですよ。全部使えとは言わない。これだけ使っただけで、日本の川は澄み、森は深くなりますよ。

自動車輸出国だとか、つまらない経済大国だとか、くだらない国際化だとかというよりも、この国は、「森と水に関しては、世界でもっとも深く美しいところだ」と世界中、どこに行つても自信をもつて語れるような国にしたほうが、ずっとよいですよ。

今後、世界中で、いろいろな病気の事に関しても、政治的な事に関しても、マルチメディアに関しても、サワサといろいろな事が一杯、起こると思うけれど、そんな事を自慢するよりも、また、デジタル化が進んでいるとか、EQだのIQだの、くだらないことを数値化するよりも、やっぱり大都市の中を流れている河川の水が澄んでいるとか、生き物がたくさんいるのに、乱暴に獲らないとか、自分の取り分のほんの些かを当然のことのように、他の生き物のために差し出すような国になっている方が、僕は日本の進むべき道なのではないか、と思つているのです。

ほかに進むべき道なんかありませんよ。

を十頭位放して、群衆が「ワァァ」と逃げ回る。ガラスに飛び込んで怪我したりしてね、街中、大騒ぎになって逃げ回る。そうするとせいで平和な街になる。いやほんとになるんだって（笑）。

三社祭りに集る連中だつて、死物狂いで御輿を担ぐでしょう。あの御輿一トンあるのですから、百人で担いだつて、一人の肩に十キロは負担がかかる。けれど、肩が届かなくて、宙に浮いてるヤツもいっぱいいるから（笑）、もっと重い。それでも担ぎたくてしようがないヤツが集まるでしょう。要するに、エネルギーのエクスタシーの極点に達する訳で、そうやって全部発散しちゃうと、人間は結構礼儀正しい人間になるんじゃないかとおもつたのですが。

人間の集団、集合はどうしてもストレスが溜まるから、暴力の発散を定期的に行つたほうがいいとおもつているのですが、残念なことに、その祭りを警察が取り締まつたりする。「それは近代国家に馴染まない」となつて言つて（笑）。その結果、つまらない事になつたのです。

祭りは、必ず怪我人が出ますし、ときどき誰かが死にます。でも、地元の人たちはそれを悪いとは思っていない。人の命はなによりも貴いなどと思つていないのです。人の命は地球より重いというテーゼは戦後民主主義の大事なテーマだったのですが、実は底が非常に浅い。

もっと鍛える必要がありますね。僕は、改変しろというのではありませんが、「人の命は何より貴い」というのと同時に、「他の生物の命はどうなっているのだ？」と、そういう事とも考えなければいけないだろうとおもいます。

僕も池に入ると、とんぼやめだかの数が増えたぞ、減つたぞ」と言つて喜んでます。だから、チリメンシヤコを一握み喰ひながら、これらを育てるのに自然はどれほどの労力を払っているのかとおもつと、罪深い事だなあ」と一瞬おもつ。でも、「おいしなあ」と食べる。そういう矛盾した存在でもあるのです。人間は、

だから、しようがない。しょうがないから、儲かればほかの生き物の方にも全部譲り渡す気は起こらないけど。

国家目標がなくなつたなどというけれど、一杯あるじゃないですか。今頃、ようやく悔い改めているけれど、自然に対して散々、酷いことをやってきたのだから、全部じゃなくて、ほんの少しいいから、返せばいいのですよ。才谷さんの収入の全部を出せとは言わない。才谷さんには、そういう凶暴な所があつて、「電氣代を払わない」とか、「原発の分は払わない」とか、そういうのは、おもしろいけれど、でも、原発でつくった電氣も使っけれど、「原発が爆けたらみんなで色々苦しみますよ」というのが僕のやり方。

電磁波が出ている高圧線の下にだつて、僕は住みますよ（笑）（スタジオジブリは高圧線のすぐナナメ下にある）。

僕は、はつきり死に向かつて、どうやって歩いて行くかを決めている年齢ですからね。そういう時に、他の生き物に対しては、自分の過分所得を使う位でいいと思う。他の生物といつたけれど、それは、役に立つ生き物だけではなくて、ゲジゲジもダンゴ虫も入っているし、ユスリカなんかも入つてる。彼らを撲滅する必要はないですよ。蚊も蠅も一緒に生かしていいですよ。蠅だけは殺してもいいけれど（笑）。

神を殺してしまつた人間と、 暴力の発散

そういうおもしろい映画をみた人に理解して欲しいとおもっていますか？

宮崎 思つていません。

無理ですね。僕は、このアニメーション映画をつくる仕事を駄菓子屋の商売だとおもっていますから。そういう事は、別の立派な人が、沢山本に書いています。

もう殺してしまつたのです。神様を。森の奥に住んでいる神様を日本人は殺してしまつた。でも殺してしまつたことは、忘れない方がよいと思つています。そのおかげで、僕らが物質的には苦勞しないで、毎日「またほか弁だな」「またコンビ二弁当だな」と思いつ



宮崎 駿 みやざき はやお(原作・脚本・監督)
アニメーター・演出家。1941年、東京生まれ。学習院大学政治経済学部卒業後、東映動画に入社。「太陽の王子ホルスの大冒険」(68)の場面設定・原画等を手がけ、その後Aプロに移籍、「パンダコパンダ」(72)の原案・脚本・場面設定・原画を担当。73年に高畑勲らとスイヨウ映像へ。日本アニメーション、テレコムを経て、85年にスタジオジブリの設立に参加。その間、「アルプスの少女ハイジ」(74)の場面設定・画面構成、「未来少年コナン」(78)の原案・脚本・場面設定、「風の谷のナウシカ」を発表、原作・脚本・監督を担当した。その後はジブリで「天空の城ラピュタ」(86)となりのトトロ(88)魔女の宅急便(89)「紅の豚」(92)といった劇場用アニメーションを発表している。著書に「トトロの住む家」「シュナの旅」「もののけ姫」の「出発点」等がある。